

令和6年度 枚方トピックス3号

7月31日 関西医科大学リハビリテーション学部作業療法学科との連携（部署内研修）

分教室では、関西医科大学リハビリテーション学部の先生から、定期的に、病気や怪我の児童生徒への学習面を含めたアプローチに関する具体的なアドバイスをいただいています。

今回は、部署内研修企画。【WISC-Vの活用と、個別支援計画】【感覚刺激への反応傾向を評価するSP 感覚プロフィール・児童生徒の事例】という2つのテーマのもと、リハビリテーション学部の、加藤先生、松島先生に教えていただきました。



勉強中です



前半は、WISC-IVからWISC-Vへの変更点として、知覚推理が「目にした物を理解する力(パズル)」と「与えられた情報をもとに適切な答えを推理する力(バランス)」という2つに分かれた話に始まり、項目ごとに、どのような検査を行うのか、そのねらいや評価に至るまでを詳しく教えていただきました。

児童生徒は、言語理解ができて、実行に移せるとは限らないし、自分の意見や考えを伝えるのが苦手な子もいること。ワーキングメモリでは、視覚的にもわかりやすい手順書などの支援、座席の位置や不要なものを取り除くなど、注意や集中力を保つ環境面への配慮があること。処理速度では、段取りの優先順位や時間配分を決めるなど、苦手を補う方法があること。そして、苦手なことをボトムアップし、強みを伸ばしつつも、【自分のやりやすいやり方を学習していく重要性】を学びました。

後半は、感覚刺激への反応傾向を評価するSP 感覚プロフィールを、事例をもとに、感覚過敏と発達障害の関連性にふれて、学びました。①低反応(無関心、反応が薄い)、②感覚探求(強い刺激を求める・活動的)、③感覚過敏(気になる、いわゆる過敏な反応)、④感覚回避(刺激を避ける。ひきこもる)という4領域があること。自分なりに感覚過敏の傾向を理解していれば、能動的にそういった刺激を回避し(④感覚回避)、自ら工夫して乗り越えられるということがよくわかりました。

今回の研修を通して、【自分自身のやりやすさ、生きやすさを学習して、乗り越える方法を知っておくことや、いかにそのことを周囲(教員)が理解し、支援や配慮ができるか】が、重要なことを学びました。